

Doshisha University Center for the Study of the Creative Economy

Discussion Paper Series No. 2018-04

東日本大震災からの復元力としての博物館の役割
～気仙沼市リアス・アーク美術館を事例に～

松野 光範



Discussion Paper Series

東日本大震災からの復元力としての博物館の役割

～気仙沼市リアス・アーク美術館を事例に～¹

松野光範²

はじめに

気仙沼市のリアス・アーク美術館を訪ねたのは、震災から2年半を経過した2013年9月上旬であった。常設展示「東日本大震災の記録と津波の災害史」を拝見し、写真や展示物に添えられた説明文の強い力が印象に残った。翌日、誰の手になるものかを問い合わせ、山内学芸係長に会い意見交換をした。その当時勤務していた大阪学院大学での学生の活動報告の展示の解説に使用するため、添えられた文章をご提供いただきたい旨の申し入れを行った。我々のボランティア活動が気仙沼での支援活動にとどまらず、ともすると震災の報道が少なくなった関西地区で、復興状況の情報発信であることに理解を示し、快く提供していただいた。

このような経緯から、その後気仙沼を訪問するたびにリアス・アーク美術館を訪問し、山内学芸係長とさまざまな意見交換を行った。これらの意見交換なども踏まえ、東日本大震災からの復元力としての博物館の役割について検討することとしたい。

1. リアス・アーク美術館について

リアス・アーク美術館は、気仙沼湾を見下ろす丘陵地にあり、石山修武氏の設計によるもので、アークの名のとおり丘の上の方舟を思わせるユニークな建物はまさにアートで、1995年日本建築学会賞を受賞した。屋外にも現代アートの展示が行われ、美術の収集・展示にとどまらずノア方舟のように三陸地域の文化資源を調査、研究、収集し、後世に伝える機能も担っている。³これといった誘因力のある展示物を保有していないが、年間40,000人弱の集客があり、収支面の課題が指摘されている施設でもある。黒字化が見込めないからこそその公的な事業であるにもかかわらず、経営的な効率のみで批判をする論調が

¹ 本論文は日本学術振興会の「課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業（H27.10～H30.9）」の成果の一部である。

² 同志社大学ライフリスク研究センター嘱託研究員

³ 標題を博物館としたのは、リアス・アーク美術館が美術品の展示にとどまらず、地域の民族・文化資源の収集・研究・展示などに力を入れているという博物館的機能に着目したことや、まちづくりの中核的な機関として機能していることによる。

高まり、施設が本来担うべき機能について論じられていないことが気にかかるところである。なお、2013年の全面開館後は、毎年50,000人前後の集客で推移しており、気仙沼に来た際には利用すべき施設のひとつとなっている。

図1：リアス・アーク美術館



(筆者撮影)

ホームページによると、リアス・アーク美術館は、宮城県が均衡ある県内の発展をはかるため創設した「広域圏活性化プロジェクト事業」の中の、「地域文化創造プロジェクト事業」の中核施設として宮城県が整備を行い、1994年10月に開館。施設の管理運営については気仙沼市・唐桑町・本吉町・志津川町・歌津町の1市5町⁴で構成する気仙沼・本吉地域広域行政事務組合が行い、2005年年5月に宮城県から財産一式が組合に無償譲与され、「圏域住民への質の高い芸術文化に触れる機会の提供」と「住民の創作活動や発表の場の提供」を通じ、美術的な視点から個性豊かな圏域文化を創造する生涯学習施設として、美術をはじめとする芸術・文化を継続的に調査、研究することを基本方針とし、常設・企画事業を展開している。

表1：リアス・アーク美術館の概要

住所	宮城県気仙沼市赤岩牧沢 138-5
面積	敷地面積：9,987 m ² 建築面積：2,340 m ² 延床面積：4,601 m ²
構造	鉄筋コンクリート造、一部鉄骨、地上3階
展示内容等	1F 常設展示 「東日本大震災の記録と津波の災害史」 2F アークギャラリー 歴史・民俗資料／美術作品常設展

⁴ 現在は、気仙沼市・唐桑町・本吉町が合併し気仙沼市に、志津川町・歌津町が合併し南三陸町になったために1市1町の構成になっている。

	3 F ハイビジョンギャラリー、ワークショップスペース レストラン
表彰等	平成 26 年度 地域創造大賞（総務大臣賞） 受賞理由：地域のアーカイブとしての新境地を開拓した
震災関連	2011 年 3 月 11 日の震災により展示の一部損壊し休館 2012 年度も休館として、7 月末部分開館（常設展示/貸館） 2013 年 4 月 3 日全館開館。 常設展示「東日本大震災の記録と津波の災害史」開始

出典；リアス・アーク美術館HPより筆者作成

2. 押し入れ美術館

リアス・アーク美術館の開館はバブルが崩壊した 1994 年であり、集客の核となるメインの美術品の展示は叶わず、「押し入れ美術館」と銘打ち地域の歴史民俗資料などを展示し、生活に身近な美術館を標榜したが、地域の住民からはまったく評価されなかった。しかもバブル崩壊の後の経済が低迷する中、無駄の対象としてやり玉にあげられたという。

そこで山内氏は「食を通して地域の歴史、民俗、生活便化を紐解く」というコンセプトでこれまでの展示をデザインしなおし「方舟日記」という常設展示を開始した。地元の人々が誇りとする「食」を中心に据えた展示が高く評価され、その後のスローフード運動とも深くかかわるようになった。スローフード運動の文化的な側面からのアプローチを山内氏が担当し、2008 年に発行された、気仙沼の食・文化・歴史・観光「まるかじり気仙沼ガイドブック」の企画・編集と監修を行っている。⁵

図 1：まるかじり気仙沼ガイドブック（2012 年復刻版）

⁵ 気仙沼では「魚食健康都市宣言」（1986 年）を行い、2003 年 3 月には、「食を中心としたまちづくり」への取組みを本格的にスタートさせるべく、市民団体、産業団体、学識経験者、公募による市民委員で構成する「気仙沼市スローフード都市宣言起草委員会」を組織し、全国初となる「気仙沼スローフード」都市宣言を行なった。その後、地域の自然と文化を守りながら、食を生かした魅力ある地域づくりに向け、様々な業種の人々がスローフード気仙沼の会員として、気仙沼の『食』を中心とした活動を展開し、市民と行政が一体となり地域を元気にする活動を展開している。



(筆者撮影)

被災後の 2012 年に復興版には、復刻の意義について次の様に記載されている。

「まち」とは物質的な構造物や建築物を意味しない。「まち」とは人の生活であり、地域の暮らしであり、地域の文化である。一般に「文化」というと、イコール「文化財」と勘違いする人も少なくない。しかし本来、「文化」とはモノではなく、人の暮らしの積み重ねなりその記憶を意味する。

我われは震災大津波によって、多くのモノを失ったが、積み重ねてきた記憶は奪われてはいないはずだ。しかし悲しいことに、人の記憶は留めようとする努力を怠ればやがて失われてしまう。我われが留めるための努力をしなければ、震災以前の気仙沼、それまで積み重ねられてきた文化的記憶は、失われてしまうかもしれない。いや、きっと失われる。

「気仙沼まるかじりガイドブック」(復興版) p5より

これらの活動は、リアス・アーク美術館が単なる美術品の収集・収蔵・展示のための機関ではなく、まちづくりの中核的な機関として動き始めたことを意味している。

3. 津波との関わり

2006年、山内氏は明治三陸大津波(1896年)の記録を伝える企画展を開催した。結果は呆然とするものだった。観覧者数は1,200名、フォーラム参加者に至ってはわずか15名という有り様であった。津波の体験をした人も多いはずだが、異様なまでの無関心さであった。明治29(1896)年の津波「三陸大海嘯(大津波)」、その37年後に昭和三陸大津波で死者約3000人、その27年後のチリ地震で約140人の死者、それからすでに40数年、次の津波はいつ来てもおかしくないとの思いからの企画であった。何度も津波がおしよせ、そのたびに復興を遂げてきた三陸と津波の繋がりはこの程度なのかと落胆する一方で不安

がよぎったという。そこで、山内氏は明治三陸沖地震を題材に、被害の凄まじさと生と死のドラマを教師の視点から描写した『砂の城』を上梓し、「天災は文化を破壊しない」という心情を訴えた。

山内氏との議論の中で印象的だったのは、経済と文化の関係についてである。津波はまさに壊滅的な打撃を与えるが文化まで奪い去るものではない。復興にあたってその礎となるのが文化である。人が集い、経済が活性化し街ができる。その経済を背景に、その地域に固有の文化が発展する。文化が先に成立することはないが、失われた街の再生に文化が大きな力となるというものであった。

ともすると経済か文化かという二者択一の議論になりがちなテーマについて、相互依存もしくは補完関係にあるのではという結論に達した。震災からの復興についても経済基盤の復興を文化的な基盤が支える、そして経済的な基盤がしっかりして、その上に新たな文化を築きあげるという見解で一致した。

そのような背景もあり、被災後リアス・アーク美術館の学芸スタッフは被災現場に出て地域内の最後の姿を記録した。

4. 津波の歴史も地域文化

2006年に実施した企画展は、宮城県沖の地震の周期はおおよそ40年とされており、いつ起きてもおかしくないという警告の意味もあり実施したが、関心は低かった。しかしながら、周期的に津波に襲われている地域であるから、地域文化を考えるときに津波は外せないと言山内氏は指摘する。

事実、気仙沼市内で壊滅的な打撃を受けたのは、戦後の埋め立て地で日本の高度成長とともに開発された町である。したがって、住民の多くが過去の津波を知らず、自身が被災するであろうことは予測していなかったと考えられる。つまり、気仙沼の基幹産業である水産業の集積していた地区には、津波による被災を前提にした文化は育っておらず、それが被害規模の拡大と復興の長期化を招いたのではないかと思われる。

東日本大震災について、想定外の未曾有の被害であると喧伝されているが、山内氏の指摘は周期的に津波に被害を受けている地区では、大津波の発生は想定されているべきであったというのである。津波の歴史として記録に残されているが、人々の記憶には残っていなかったのである。過去の津波に関する石碑が多数残されている。これは、津波の襲来を示す、地域の記録である。にもかかわらず、利便性を求めて低い埋め立て地に移り、工場

を集積させた結果の被害の拡大は人的災害であるとも捉えられる。そのような意味で想定外であったのは人の記憶であったことが指摘できる。記録は残っているが、残す努力・伝える努力をしなければ記憶の中には残らない。これが、リアス・アーク美術館が東日本大震災の記憶をつなぐための展示を始めた大きな理由である。

5. 東日本大震災の記録と展示

リアス・アーク美術館に勤務する人間はなんらかの被害を受けた。山内氏自身も自宅が被災し、しばらくの間美術館で警備を兼ね避難生活を送った。その間に、学芸員が集り記録を残すことにした。気仙沼を知る自分たちであるからこそ、どこがどのように被災し、破壊されたかを知っている。さらに業務として気仙沼の文化を構成する津波の被災の歴史の資料を収集し整理してきたことなどから、現場に足を運び撮影を開始した。その後3月23日に気仙沼市長と教育委員会から震災の被害の記録と調査担当として特命がくだり、公務として撮影した写真は約30,000点、収集した被災物は約250点にのぼる。この活動は2012年の年末まで続けられた。

リアス・アーク美術館常設展示図録「東日本大震災の記録と津波の災害史」によると、その目的は次の3点とされている。

- ① 東日本大震災および大津波によってもたらされた、気仙沼市、南三陸町への災害被害の実態を記録、調査し、それらを復旧、復興活動において有効に活用できるよう取りまとめること。
- ② 今後とも想定される地震、津波災害に向けて、防災教育や減災教育のための資料として活用可能なように震災被害の実態をとりまとめること。
- ③ 東日本大震災という重大な出来事を、地域の重要な歴史、文化的記憶として後世に伝えるとともに、日本国内、あるいは世界で行われている災害対策事業等への具体的な資料提供等を行うこと。

そして、2013年4月3日より常設展示として公開することとなり、被災現場で撮影した写真203点、収集した被災物155点、歴史的資料137点が納められている。前半は【被災現場からのレポート】として、被災現場の多様な状況をまとめ、後半は【被災者感情として】【失われたもの・こと】【次への備えとして】【町の歴史と被害の因果関係】の4つのテーマまで構成されている。

この展示の特徴は、撮影した写真や展示物にキャプションが添えられていることである。

2013年9月に訪問した際に展示を拝見し、写真や展示物もさることながら、心にひっかかる棘のような強さを持った文章に魅かれ、電話で問い合わせ多忙と断られた山内氏を訪問した。我々のボランティアの目的が復興庁の支援によるもので、2年半が経過し日々減少するメディア報道に対し、現地でのボランティア活動を通じて得たものを大学のある地域に戻り情報発信をする“メッセンジャーとしてのボランティア活動”の趣旨に賛同したものであることを説明した。さらに、メッセンジャーとして大阪に戻り三陸新報社より借用した被災当時の写真パネル30枚と自分たちの撮った現在の気仙沼の写真を比較展示し、これにリアス・アーク美術館にて使用しているキーワードを組み合わせて来場者の理解を促進したい旨の要請をした。ほぼ不可能であろうと予想していたが、快く了解していただき、すべてのキーワードをデータで受領した。

以下、展示物に添えられていたキーワードについて検討を行う。

6. 展示物とキーワード

(1) 東日本大震災とメディア報道

キャプションとは、通常写真などに添えられた説明文を指すが、この展示「東日本大震災の記録と津波の災害史」にはキャプションとして108のキーワードが添えられている。これは、展示されている資料を通じメディアによって語られていない姿や対象物の背後にある物語に思いを寄せてほしいという、クリエイターでもある学芸員の願いである。これが、記事に添えられた報道写真のキャプションとの違いではなかろうか。ちなみに、「新聞」というキーワードは、次のように説明されている。

●新聞：

被災地で通常通り、新聞が配達されるようになったのは、早い場所でも約一週間後だった。それ以前に目にした新聞もあったが、それらはいち早く被災地入りをした支援者等から提供されたものだった。

震災直後から数か月は各新聞社とも、被災地情報が一面を占めていたが、徐々にその内容は変わっていった。地元紙以外では震災の話題も原発事故が中心となり、津波被災地の情報としては、早くも復旧、復興を語り出し、震災発生から2週間後には、「明るい話題はないでしょうか」などと記者に尋ねられたりもした。

新聞情報は最も信頼性が高いと一般に考えられている。確かに掲載されている情報はそうだろう。しかし、編集の結果、紙面に載らない情報も数多く存在するはずだ。情報は選択されている

東日本大震災から2年半が経過し、我々が住んでいた関西地区では、東日本大震災の復興状況については、ほとんど報道されなくなっていた。我々が参加したボランティア活動には、メッセンジャーとして自分たちの住んでいる地区で復興状況について情報発信することが目的のひとつとなっていた。大学祭などでのパネル展示に加え、吹田市役所、吹田市市民活動センター、吹田市千里センターなどでパネル展を開催した。その後、半年ご

とに1週間程度ボランティア活動に参加し、その時々の変わりゆく気仙沼の様子を写真に収め発信するというメッセージャーとしてのボランティア活動を、2年間4クールにわたり実施した。

次は、マスメディアから発信された被災者の「勇気」や「元気」というキーワードについてである。

●勇気：

「被災地で勇気もらった」という言葉をたくさん聞いた。「自分ならば到底立ち向かうことなどできない困難に、傷ついた心と体でおもむいていこうとする被災者の姿に感動した」ということなのだろう。しかしそういうことではないのだ。そうしなければ生きていけないだけなのだ。それは勇気ではない。私たちはその場に引きずり出されてしまっただけ。望んでそうしているわけではないし、勇気があるからでもない。ただ失われた暮らしを取り戻したいだけ、同じことを繰り返したくないだけなのである。

メディアで広く取りあげられているのは、被災した人たちの頑張る姿だ。「勇気」と「元気」というキーワードには、被災した人たちの内面すなわち、報道の裏側にある本当の姿が描かれているように思われるが、いかがであろうか。さらに、仮設商店街のキーワードはメディア報道について、メディアの取り上げたいものと、その背後にあるものを際立たせている。

●元気：

「あんなことがあったのに被災者は元気だった」、そういう言葉を何度も耳にした。「支援に行き、逆に元気もらった」、そういう言葉もたくさん聞いた。そして、「私たちは元気です」、そういう被災者の言葉もたくさん聞いた。災害に負けない人間の強さ、不屈の東北人というイメージがメディアなどでも用いられるようになった。

被災地以外の地では、打ちひしがれた被災者の姿をイメージし、多くの人々が心を痛めていたのだろう。しかし、実際に訪れた地獄のような被災地でも、触れ合った被災者たちは気丈に、笑顔で頑張っていたのだろう。そんな姿に感動を覚え、「元気もらった」と語ったのかもしれない。

現実を語れば、確かに元気な人もいる。しかし、大半の被災者は顔で笑って心で泣いている。生きるために、堪えて元気を出してはいるが、決して元気なわけではない。まだまだ笑うことができない人もたくさんいる。表面と内面は一致していない。

●仮設商店街：

店舗を失った、あるいは商店街自体が壊滅したなどの被害を受け、それらを支援するために用意されたものが仮設商店街である。

仮設商店街ができたことで、被災した地域住民は日用品を購入できるようになり、多少なりとも生活が安定するようになった。また、飲食店などが営業し始めたことで、「気晴らし」「知人とのコミュニケーション」ができるようになり、精神的にも救われる部分がある。

マスコミ等の目は「復興のイメージ」をわかりやすく表現できる仮設商店街に向けられる。そして「被災地はたくましい」、「被災者は元気だ」というイメージを、仮設商店街の賑わいから語ろうとする。しかし、同じように被災していても仮設商店街に出店することなく、独自に頑張っている店舗もたくさんある。自力で頑張っているからと言って、被害が軽かったわけではないし、仮設店舗よりも条件がいいというわけでもない。被災地には自力で頑張っている被災者がたくさんいる。

(2) 「東日本大震災の記録と津波の災害史」の展示の特徴

学芸員が撮った写真のほかに、炊飯器や携帯電話、壁のタイル片などが展示されている。

そこに掲示されていたキーワードは「ガレキ」であった。さらに、「被災した人を被災者と呼ぶように、被災した物は被災物と呼べばいい。ガレキではなく、被災物と表現してほしい」との提案のキーワードが添えられている。

●ガレキ：

瓦礫（ガレキ）とは、瓦片と小石とを意味する。また価値のない物、つまらない物を意味する。被災した私たちにとって「ガレキ」などというものはない。それらは破壊され、奪われた大切な家であり、家財であり、何よりも、大切な人生の記憶である。例えゴミのような姿になっていても、その価値が失われたわけではない。しかし世間ではそれを放射能まみれの有害毒物、ガレキと呼ぶ。大切な誰かの遺体を死体、死骸とは表現しないだろう。ならば、あれをガレキと表現すべきではない。

図2：リアス・アーク美術館の学芸員が撮った写真と被災物の展示の様子



画像提供：リアス・アーク美術館

その中で、最も特徴的で挑戦的なのは展示された被災物にハガキが添えられていることである。通常の展示であれば「炊飯器・〇月〇日取得・場所〇〇」というキャプションが付けられる。ハガキに書かれている内容は、被災者からの聴取した事実ではなく、その被災物を収集した学芸員のフィクションである。この場所で、この物を通じてどんな暮らしがあったのかなど、様々な被災者のインタビューを通じて得られたエピソードを山内氏が構成したものである。

これらのエピソードから、この被災物の背後にある具体的な物語へ想像力を働かせることにより、伝聞情報でしかなかった震災・津波の被害へ思いをいたすことが可能となる。様々な批判があるやに聞いているが、選択されたメディア報道とは異なる、被災物の背後にある実際の生活への想像力への入り口として、あたかも自身の経験であるかのように伝えるための有効な手段であると考えている。

図3：炊飯器とタイル片の展示と添えられたハガキ



画像/資料提供：リアス・アーク美術館

(3) 来場者の評価

リアス・アーク美術館の「東日本大震災の記録と津波の災害史」の展示方法は、従来の災害での被災の歴史を展示する博物館の手法とは異なっている。記録者である学芸員の主観を通じ、自己の経験であるかのように感じさせるために、ストレートな感想やキーワードを使うという手法に批判もあったとのことである。特にハガキに記載された文章について、展示にフィクションが入ることへの批判があったようである。

しかしながら、トリップアドバイザーによる投稿は 23 件であり、その評価は 4.5 と高い評価となっている⁶。被災物についているコメントについて、①学芸員の創作であるこ

⁶ https://www.tripadvisor.jp/Attraction_Review-g1023417-d4605832-Reviews-Rias_Ark_Museum_of_Art-Kesennuma_Miyagi_Prefecture_Tohoku.html

とについての賛否はあるが、そのコメントが日常を突然奪われる恐怖を身近に感じさせる、②震災の被害状況を写真、実物、文章の三層構造の説明により、気仙沼の震災被害を多面的に知ることができた、③辛い記録だけど、残された人はしっかり記憶しておくことが大切などという、肯定的なコメントが多かった。一部にハガキのコメントが被害者のものと誤解しているコメントがあったが、気仙沼訪問の際には必見のスポットとのコメントが多いようである。

同志社大学のビジネススクールにおいて、若手の友禅作家や陶芸作家に対し、自身の制作物の制作意図を言葉で伝えるという講義が行われている。かつての名工と言われる人たちは、「見て分らない者には、言っても分らない」と、鑑賞する側に具体的な制作物に込められた制作意図すなわち作家の心の内（暗黙知）の理解を求めることが当然とされた。これに対し、自身の制作物に込められた制作意図を、言葉にして説明（形式知）して自身の作品への理解を深め、それを入り口に鑑賞者が作品に対する評価を発展させていくよう仕向ける試みに似ている。

以上のことから、見る人の感じ方の制約条件になるのではないかと批判はあるにしても、来訪者に対して地域文化の背景にある津波に対する理解と共感を深めようとする展示の意図は的確に伝わっているのではないかと判断される。

7. 復興におけるリアス・アーク美術館の役割

リアス・アーク美術館はバブル崩壊後に費用対効果の点からいかなものかという批判が高まり、開館当初よりの「押し入れ美術館」のコンセプトを見直し「方舟日記」として三陸を中心にした歴史・民俗資料の収集・収蔵・保管と常設展示を行う博物館としての機能を担うことを明確にしたが、地域の人々の関心は高まらなかったという。そこで、気仙沼を中心とする三陸沿岸の文化の背景には地震や津波があることを意識し、三陸地方を襲った地震や津波の歴史的資料の収集を開始した。これらの活動の成果として、2006年明治三陸大津波（1896年）の記録を伝える企画展を行った。しかしながら地域の人々の関心は低く、入場者1200人と大きな成果は得られなかった。つまり、津波の記録は存在するが、時間の経過とともに地域住民の津波に関する記憶は失われてしまったのである。

これらのことを受け、山内氏は2008年に明治三陸大津波を題材にした「砂の城」という小説を発表した。その中で、震災後には防潮堤や工場・住宅など形あるものの再建が優先される。しかし文化的、民俗学的な視点からは被災した前後をどうつなぐか、つまり

その地域を支えてきた人々の心を絶やさないことが重要で、1896年の明治三陸地震での政府の対応は地域文化を無視し、経済的な面での復旧が優先され、文化的な損失は計り知れないと訴えたのである。したがって、震災後2年が経過し開始した常設展「東日本大震災の記録と津波の災害史」は、これまでの延長線上の活動であり、壊滅的な被害を受けてしまった「地域文化」を掘り起し、次の世代へ受け渡すことを目的としている。

リアス・アーク美術館では、開設当初よりコレクションの収集・保管・研究・展示・教育が行われてきた。さらに、この地域を支え続けてきた食をキーワードとして、「方舟日記」という常設展示により、地域の民俗、習俗、歴史、生活文化を次世代へと伝えていくと同時に、芸術文化への理解を促進してきた。加えて、美術館に興味のない地域の人々に対し、地元のども劇団「うを座」への協力、観光事業（解説看板の作画、監修など）への協力などのアウトリーチ活動を行うとともに、スローフード気仙沼で中心的な役割を担うなど、まちづくりの理論的な面での中核的な存在となっている。

これらの活動と並行して、震災後は、壊滅的な被害を受けた地域文化の掘り起しと再生活動を行っている。文化とは物や行為そのものではなく、積み重ねられた生活そのものと考えられる。したがって、自然災害は形のあるものは破壊できるが、文化には形がなく破壊できない。つまり、生活の中に埋め込まれた記憶そのものであり、次の世代へ引き継がれていくべきものである。震災からの復興は形のあるものを優先しがちであるが、リアス・アーク美術館の活動は、震災からの復元力の基盤となる地域文化を守る砦としての中核的な役割を担っていると考えられる。

おわりに

気仙沼でのボランティア活動を撤収する際に、学生をリアス・アーク美術館に案内した。その理由は、大阪に戻りメッセンジャーとしてのボランティア活動の一環として情報発信するために、気仙沼での活動の記憶を定着させることにあった。大学祭で、三陸新報社より拝借した30枚の発災当時の写真パネルに自分たちの撮った写真にリアス・アーク美術館より拝借したキーワードを添えて展示した。関西では現地の報道がほとんどなく復興はどんどん進んでいると思っていた、との感想が多かった。我々の展示に共感したアメリカ人の教員から、現地のテレビ局から入手したという記録映像の提供を受け、さらに充実した展示となり、その後、留学生を気仙沼に案内するきっかけとなった。

リアス・アーク美術館の特徴は「美術館」と名乗っているものの、地域の総合博物館的

な機能を担う、まさに地域文化を伝える拠点となっていることである。さらに、山内氏も一般的な学芸員としての範疇を越え文化、芸術、地域文化、津波災害、まちづくり、教育といった複数の分野にわたって活動を行っている。山内氏はスペシャリストでありながらジェネラリストのような役割を担っており、著者も議論が煮詰まった際に訪問し、意見交換をしながら課題を整理してきた。問題をときほぐす幅広い知識をもった通訳のような存在で、これが本来の意味でのキュレーターではないかとの印象を持っている。

以上のことは、美術館でありながら博物館機能を担っているリスアーク美術館という場があり、山内学芸員という専門知識に加え幅広い知識と行動力を持った人がいるところに、東日本大震災という大規模な災害が発生したことによる相互作用によるものと考えられる。震災前後のリスアーク美術館での一連の出来事のメカニズムを解明することが、復元力の強化につながるものと考えられ、今後の課題としたい。

山内氏からは、現在の震災の常設展示について、仙沼以外の人たちの見学が多く概ね好評だが、地元の人々の訪問が少ないことが当面の課題とのことであった。震災後7年が経過し復旧は一段落したと思えるが、震災の記憶を次の世代に引き継ぐためには何が必要なのだろうか。最後に、山内氏が上梓した、明治三陸大津波の記録を元にした小説『砂の城』の中の一文を紹介し論を終えることとする。

「忘れるべきことは忘れる、伝えるべきことはどんなことがあっても守り伝えてゆく。そういう強さがなければ未来を築くことなどできないよ。それが私たちの仕事、いや、今を生きるすべての人間の義務なんだ。文化を伝えてゆくという事は命を繋いでゆくことと同じなんだよ。文化というものは一人ひとりの名も無き人たちの日常の積み重ねでできている。その名も無き人たちが、どう生きて、どう死んだのかということをお大切にしなければ、石碑なんか作っても意味が無いんだよ。大規模な災害はどうしても数字によって表現されてしまう部分が多いんだが、数字で表せないところを見つめていかないと」。

以上

【参考文献・参考資料】

石山修武著『世界のまちづくりだ』晶文社、1994年。

上山信一・稲葉郁子著『ミュージアムが都市を再生する—経営と評価の実践』日本経済新聞社、2003年。

スローフード気仙沼『まるかじり気仙沼ガイドブック』（2012年復刻版）

山内ヒロヤス著『砂の城』近代文芸社、2008年。

山内宏泰著「博物館が復興に果たす役割」博物館研究、2014年10月号。

リアス・アーク美術館常設展示図録「東日本大震災の記録と津波の災害史」2014年。

【参考 URL】

リアス・アーク美術館 HP <http://rias-ark.sakura.ne.jp/2/outline/> 2018年10月1日閲覧

トリップアドバイザー [https://www.tripadvisor.jp/Attraction_Review-g1023417-d4605832-Reviews-Rias Ark Museum of Art-Kesenuma Miyagi Prefecture Tohoku.html](https://www.tripadvisor.jp/Attraction_Review-g1023417-d4605832-Reviews-Rias_Ark_Museum_of_Art-Kesenuma_Miyagi_Prefecture_Tohoku.html) 2018年10月1日閲覧